

会計学の根底にあるもの¹⁾

田 中 章 義



本日は学年末のお忙しい時期にもかかわらず、わざわざお越し下さいまして、本当に有難うございます。拝見したところ、学生諸君から卒業生をはじめとして、私の先輩にあたる専門家の方々までお見えでありまして、すべての皆様に満足いただけるようなお話できるかどうか、ちょっと心配です。

「会計学の根底にあるもの」という演題ではありますが、私の会計学の根底にあるもの、さらには、日本の会計学の根底にあるもの、あるいは「会計の根底にあるもの」にも、話題が及ぶかとおもいます。またここでの会計とは、企業会計に限定したものであることとお断りしておきます。

どうか、しばらくの間、お付き合い下さいますようお願い申し上げます。

1. 私の原体験

今年は、日本が第2次世界大戦に負けてから、丁度60年目、つまり戦後が還暦を迎えた年でございます。60年前の私は、札幌市立山鼻国民学校5年生、満10才でした。

1) 本稿は、2005年3月19日に、東京経済大学2号館B101教室でおこなわれた「田中章義教授退任記念講義」の記録を本人が若干補正したものです。会場では、数枚のレズメを配りましたが、その主なものは文中または脚注に挿入しました。

あの戦争中と戦後数年間の体験は、大変強烈で、いまでも忘れられません。あの戦争で、日本人は約 300 万人死にました。私の身近な人たちも戦場や本土空襲で亡くなりました。60 年前の 3 月 10 日の東京大空襲では、約 10 万人の市民が、投下された 12000 発の焼夷弾に逃げ道を断たれて焼き殺されました。8 月 6 日の広島原爆投下では、約 13 万人の人が 11 月までに死亡したと推定されています。

いまでは、事件や災害で人が亡くなると日本中が大騒ぎをいたしますが、当時は、よほど偉い人が死なない限り、公表されませんでした。家族に戦死の知らせが来ても、嘆き悲しんではいると非国民といわれて叱られたものです。私自身も当時は軍国少年でありまして、日本は負けるという両親を非国民だと非難したことを覚えております。終戦の詔勅を聞いたときには、大声で泣きました。比較的裕福だった家計も、インフレと農地改革で激変してしました。

しかし、子供の私にとって一番辛かったのは、いつもお腹が減っていたことです。いま思うとこれが飢餓というものでした。お米を食べられるのは 1 日 1 回で、あとは代用食でした。お米と言っても薄いお粥でして、カボチャの葉っぱや野草が沢山浮かんでいます。これは消化がよくなって、トイレへ行くと全部そのまま出てしまうんですね。胃腸の弱かった私は、アフリカの難民孤児のようにガリガリに痩せて、ほとんど栄養失調状態でした。

この戦時中はまた特別ですが、それ以前の日本にも、「貧乏」のために何時もお腹を減らしている人たちが大勢おりました。丁度いま、大相撲の大阪場所が開催されていますが、昔は、地方巡業にきた親方から「毎日白いメシが腹一杯食えるぞ」と誘われて、相撲部屋へ入ったという少年が多かったんです。

だから相撲は、ハングリー・スポーツといわれたんですが、いまはそうではありません。その代わりに、強い相撲取りも少なくなりました。日本から、その日食うに困るような貧乏が無くなったのは大変結構なことです。世界中から無くなったわけじゃありません。日本は、テレビや自動車と一緒に、貧乏も外国へ輸出してしまったんですね。

2. 高校から大学へ

私は、戦時中の栄養不足が祟って敗戦と同時に肺結核を発病しました。父は、つてを頼って私を北大病院へ連れて行って、「先生、大丈夫でしょうか」と聞きましたら、当時の第 2 内科の中川教授は黙って首をかしげました。それを見て、私は大変なショックを受けて、体がスーと地中に沈んでいくような感じがしました。

だから、医者になった友人には、患者の前で黙って首をかしげてはいかんと忠告しております。職業によって、してはいけない動作があるんですね。お巡りさんは、減多なことで走っちゃいかん、と言われておるそうです。お巡りさんが走るのは非常事態です。寿司屋の職人は鼻水を垂らしてはいけません。大学の先生は何でしょうか？ ま、最近では、手鏡を持ち



歩いてはいけないそうですね。(笑)

それから2年間休学して家で寝ていました。当時は安静以外の治療法はなかったのです。それでも、あらゆるものを食糧に交換して、一所懸命に栄養を補給してくれた両親のおかげで何とか命びろいをして、札幌市立柏中学校から札幌南高等学校へと進むことができました。

高校生の頃私は、結核を治す医者になりたいという希望がありました。そろそろ入学願書を出すという3年生の1月でしたが、受験勉強が一段落したので学校の図書館をのぞいてみると、当時評判だった河上肇が書いた『自叙伝』²⁾がありました。1冊借りて読んでみると、これがとても面白い。5分冊ありまして、次々に借りだして、最後は学校を休んで三日間ぐらいで全部読みました。

この河上肇という人は、大正から昭和にかけて、日本中の学生、インテリ層に大変大きな思想的影響を与えた経済学者でした。現在、同じような影響力のある人を挙げようと思っても思い浮かばないのです。

河上さんは、宗教家の心情をもった人で、足尾鉾山鉾毒事件のときには、自分の衣類を全部行李に入れて送ったりしました。京都大学の経済学の教授をしているときに出版した『貧乏物語』1917(昭和6)年という本は、当時のベストセラーになりましたが、その中に、貧乏をなくする方法として、欲望を抑えること、とくに金持ちが贅沢を止めることが必要だと言っています。

その考え方の未熟さを社会主義者から批判されまして、河上さんは、マルクスの書いた『資本論』の勉強を一から始めます。そして、『社会問題研究』³⁾という月刊個人雑誌を発行しますが、これも大変売れた雑誌です。後で申し上げる会計学の黒澤清先生や岩田巖先生は学生時代、河上さんを崇拜してまして、この『社会問題研究』を定期購読していたと伺ったことがあります。また、木村和二郎先生は、神戸高商から河上先生を慕って京大経済学部へ入り、経済学を勉強していました。本当は経済学を続けたかったのだが、たまたま和歌山高商に簿記教員の口があったので、会計学を専攻することになったのだと、人づてに聞いたことがあります。

河上先生は、いろいろな思想遍歴をへたのち遂に政治運動にふみ込むのですが、その時に詠んだ「辿りつき振り返り見れば山川を 越しては越して来つるものかな」という短歌は有名です。河上先生は、結局、1933年(昭和8年)治安維持法によって逮捕され、入獄していた

2) 河上肇(1879-1946) 岩波書店(5冊本)1952。

3) この雑誌は1919年から1930年にかけて、106号まで京都弘文堂から出版された。

のですが、皇太子（現天皇）誕生による恩赦で、約4年間で刑務所を出て自宅で蟄居していた第2次大戦中にこの『自叙伝』を書いていたのですが、その中に、“医者はどうにも努力しても、生涯でたかだか数千人、数万人の命を救うだけだが、経国済民の学である経済学は、数千万、いや世界中の人を救うことが可能なのである”というような意味のことが書いてありました。

河上先生は、非常な名文家ですが、アジテータでもあったわけですね。いま考えてみると、医学だって、やり方次第では、数千万の人を救っているわけですが、私はこれを読んで、すっかり感心して、医学部から経済学部へ志望を変更しました。河上さんのアジテーションに乗ったわけですが、後悔はありません。なお、河上先生は、この自叙伝が出版されるのを待たないで、敗戦の翌年の冬に、栄養失調から肺炎を併発して亡くなっています。1946年1月30日、68才の冬でした。

3. 大学時代

北大へ入学後、医学部へいった友人たちと、「どんぐり会」という名のセツルメントのサークルを作りました。これは、日高に近い穂別村というアイヌ人が多い村の保健や教育を支援するサークルでした。そこにも満足に食べられない子供たちがいました。このサークルはその後20年ほど続きまして、多くの志のある人材が育ちました。昨年の夏、50周年を記念してOBが60名ぐらい集まり、現地を訪問しました。村の面影は一新しておりましたけれども、当時の小、中学生達も立派な大人になってやってきて、感動的な2日間を過ごすことができました。

北大の経済学部では、3年から内海庫一郎先生の経済統計学のゼミに入りました。講義での雑談が面白かったのと、河上肇の孫弟子だと聞いたからです。

1959（昭和34）年に大学を卒業したのですが、サークル活動と学生運動の方に熱をいれていたもので、勉強をし直したいと思って大学院へ進むことにしました。当時の大学院経済学研究科は、出ても先の見通しが立たないところで、志願者も私1人でした。試験監督に來た事務長に「田中さんは金の卵ですよ」とおだてられましたが、孵えるかどうか分からない卵では意味がありません。（笑）それでもぜんぜん不安を感じなかったのは、やはり若かったからだとおもいます。

大学院ではよい先輩たちに恵まれました。修士課程では、労働生産性の測定問題をやりました。博士課程に進んでからは、統計の誤差論をやろうかと思ひまして、モルゲンシュテルンの『経済観測の正確性』⁴⁾を読んだりしていました。

1959年から1964年にかけての5年間の大学院時代には、官庁統計の調査員のアルバイトを

4) Oskar Morgenstern, On the Accuracy of Economic Observations, Princeton Univ. Press, 1950 (1st ed.), 1963 (2nd ed.).

しました。ご存知のように、日本の官庁統計の調査実務、たとえば、企業・事業所統計、消費者物価統計、商業動態統計、などの調査実務は、総務省、経済産業省、などの所轄官庁が、市町村へ「行政委託」しているのです。経済統計学のゼミだということで、市役所から調査員を定期的に頼まれるわけです。いま挙げた以外でも、主要な官庁統計の調査はかなりやりました。

このアルバイトはその後の研究に大変役に立ちました。役に立ったことは、いろいろあるんですが、その一つは、これらの経済統計調査では、たいてい資本金額とか売掛金、売上、などの財務データを調査するのですが、調査票を会社の人に渡すと、会社の貸借対照表や損益計算書を引っ張りだしてきて、そこから書き写してくれるんです。それを見ながら、もし、この元になっている会計数値の測定に間違いがあったら、あるいは勘定科目の認識に問題があるとしたら、統計の誤差を論ずるだけでは足りないのではないか、ということが気になりました。私はどうもその元、その元、が気になるタチのようなんですね。

ところが、会計数値の問題が気になっても、私には当時、簿記や会計学の知識がまるでありませんでした。学部で会計学の講義を覗いてみたんですけども、「会計の本質」なんて話しをしていて、直ぐは役に立たない。まあ今日の話みたいなものです。(笑)それで、夜の簿記学校へ1年ほど通って、日商2級程度の知識を身につけました。大学院博士課程の1年から2年目の頃のことです。そして私の関心も統計的誤差理論から、統計と会計の関係へと移っていきました⁵⁾。

大学院博士課程3年の秋に、立命館大学と東京経済大学から、就職の話しがありました。先ず、立命館大学の面接試験を受けました。小椋広勝というマルクス経済学の先生が主査で、私が出しておいた論文を読んでいて、資本主義社会を有機体と見ているのがおかしいと批判されました。しかし、マルクスだって資本を生き物のような有機的構造だと見ているではありませんかと反論すると、そんな理解では問題にならないと言われるわけです。まずい雰囲気になって、これはダメかなと思いました。

札幌へ帰ってから調べてみると、20世紀前半にナチスドイツが、「国家有機体」説を唱えていたことへの反発が強かったことがわかりました。当時はまだ、資本を有機体とみる見方は一般的ではなかったようです。

有機体というのは機械と対立した概念なんです。生物がその例ですが、自己同一性を保ちながら、変化し(昆虫なんかは非常にハッキリと変態しますね)、発展するものは、主体ともいわれますが、有機体なのです。資本を有機体として捉えたのは、マルクスの偉大な功績で、そのお陰で、資本の発生・発展過程とその諸要素の関係を、つまり資本というものを明らか

5) その頃の論文としては、「F.ジージュクの『非正規的統計手続論』について」1962、「会計と経営統計の関係について」1963、「会計計算構造とその記載対象の関係にかんする一考察」1963などがあります。

会計学の根底にあるもの

にすることができたわけです。

立命館大学の面接試験は結局パスしたのですが、健康診断で肺結核の既往症があるということで駄目になりました。

4. 東京経済大学

次は東経大ですが、健康診断はなかったんですが、教授会で「経営統計」1科目だけで専任教員を採るのは贅沢だという意見がでたということで、経済学部長だった渡辺輝雄先生の提案で簿記も持つことになりました。当時は、大学全体で専任教員が50人ぐらいいなかったのですから、無理ありません。

専任講師として採用されまして、1964（昭和39）年に東京へ出てきたわけです。丁度東京オリンピックが開催される年で、東京中が掘り返されているという感じでした。

それから、経営統計と簿記原理の2科目をずうっと担当してきました。当時は、週に全部で8コマほど持ちました。

最初は慣れない簿記の授業で苦労しました。とくに当時の第二部、夜間部は、職業を持った学生が大部分でした。授業中に、やたらと難しい質問をする奴がいます。君は何だと聞くと、国税庁に勤めているんですね。昼間の仕事で引っ掛かったことを聞いてくるんです。こっちだってそんなことは分からないんだけど、相手をしていると授業が進まないという文句がでる。そこで、彼を教壇に上げて代講をさせたりしました。これは私にも勉強になりました。それから、私より簿記のできる学生がいて、ちょくちょくこの手をつかいました。（笑）

ゼミナールの方は、これは、とても活発でした。夏休みの合宿などは、1週間ぐらい涼しいところへ行ってみんなで翻訳をしたり、専門書を読んだりしたものです。今日もその時の諸君が来てくれています、本当に楽しい時代でした。

同時にその頃、学生に軟式テニスのクラブを作るからと頼まれて、部長になりました。一緒にコート作りを手伝ったりしながら関東リーグの8部あたりからスタートしたのが、今は男女とも2部で、1部昇格を狙っています。伊藤甫律監督とOBの支援のおかげです。

ゼミナールとソフトテニス部はその後、私にとって若さの源でした。一緒にいると、彼らに同化されてしまっていて、つい自分も20才台だと錯覚したまま、今日まで来てしまったような気がします。これからの落差が心配になります。

最近では、OBの諸君もいろいろと心配をしてくれまして、ゼミの面倒をみてくれたり、私の生活上の相談に乗ったりしてくれます。私よりしっかりした考えをしているので、頼もしく思ったり、嬉しく思ったり、本当に感謝しています。

さて、研究の方ですが、会計を統計の中に包摂するような体系を作りたいと考えていました。

しかし、会計学は体系的に勉強していなかったもので、まず会計学の基本文献と言われていたものを読んでみることにしました。当時基本文献といわれていたペイトン、リトルトン、ギルマン、シュマーレンバッハ、シェアー、チェンバース、マテシッチ、中西寅雄、黒澤清、木村和三郎、岩田巖、馬場克三、畠中福一、阪本安一、山下勝治、宮上一男、浅羽二郎、井尻雄士などの諸先生の本を、ゼミでも読んだわけです。

私には、会計学では、特定の指導教授という人はいませんでした。その著作を読んだ人たちが、みんな私の先生になった訳なんです。特定の先生に付いていたらこんなに自由勝手に考えて発言できなかったかもしれません。いま思うと、これも幸いなことであったとおもいます。

5. 日本の会計学の特徴

(1) ハングリー・サイエンス

そうやって本を読んでいて、一つ気がついたのは、日本の会計学というのは、欧米の会計学の紹介、研究が多いのは事実なんですけれども、欧米の会計学には見られないある独自性を持っているということでした。特に、中西寅雄、黒澤清、木村和三郎、岩田巖、山下勝治、馬場克三、畠中福一、などの諸先生の学説に、それを感じました。

その独自性とは何かということは、一概には言えませんが、一つ共通しているのは、会計学を社会科学として位置づけていて、社会との関係に強い関心を持っていたということです。また、この方たちは、中西先生を除いて、みな 1902（明治 35）年から 1906（明治 39）年までの 5 年間の間に生まれておられます。同時代の人たちです。

先ほどハングリー・スポーツということを申し上げましたが、それとは違う意味ですけれども、学問にも、ハングリー・サイエンスというものがあるのではないかと気付きました。つまり、当時の日本会計学は、ハングリー・サイエンスではなかったのか、と思ったのです。

そう思い当たった理由を説明するには、戦前の学校制度を少し解説しなければなりません。敗戦前の日本は、つまり 1945（昭和 20）年以前の日本では、義務教育は小学校の 6 年間だけでした。小学校からさらに上級の学校へ進む道は、大きく二つのコースに分かれていました。それは、(1) 旧制の実業学校へ進むコースと、(2) 旧制の中学校へ進むコースです。旧制の実業学校には、商業、工業、農業、水産などがありましたが、卒業後は社会に出て働くことを前提にしています。旧制中学校のコースは、さらに旧制高等学校、旧制大学へ進学することが前提でしたが、進学するには大変お金が掛かりました。いまのような奨学金制度もなくアルバイト口もありません。したがって、家業を継ぐ予定の少年や、経済的余裕がない少年は、1 番目のコース、商業とか工業、農業などの実業学校を選ぶのが普通でした。

会計学の根底にあるもの

先に挙げた黒澤清、木村和二郎、岩田巖、馬場克三、畠中福一、といった先生方は、みんな商業系の実業学校のご出身です。この東京経済大学の前身の大倉商業学校というのは、1900（明治33）年に大倉喜八郎によって設立されたものですが、勤労少年のために、大変安い授業料の夜間専修科を併設していました。木村先生と畠中先生は、大阪の「成器商業学校」の夜間部の生徒、当時の言葉でいうと苦学生でありました。

木村先生は、昼間は会社の給仕（細かい雑用をする少年のことです）をして働いていたそうです。和歌山高商の先生から、大阪市立大学の教授になり、大変すぐれた業績をあげた方でしたが、晩年には失明されていて、白いステッキを握って日本会計研究学会大会の会場へ来ていたのを一度だけお見かけしたことがあります。後ろの席で木村先生の背中を見つめながら、その時私は、石川啄木の「飛行機」という詩を思い出していました。それは、

「見よ、今日も、かの蒼空に 飛行機の高く飛べるを。

給仕勤めの少年が たまの非番の日曜日、

肺病やみの母親と たった二人の部屋にいて、

ひとりせつせとリイダアの独学をする眼の疲れ.....

見よ、今日も、かの蒼空に 飛行機の高く飛べるを。」⁶⁾

というものであります。

これは、私自身が肺病をやんで寝ていた時に、親の本棚から持ち出して読んだものですが、病室のはるか上を飛んでいる飛行機は、私の絶望とかすかな希望の象徴でありました。

また、一橋大学の岩田巖先生は、アカウントビリティの理論、照合の理論という独創的な学説を作った方ですが、豊島区にある豊山（ぶざん）中学校在学中にお父さんを亡くしまして、途中から早稲田実業学校へ転校しています。

商業学校を卒業するとそのまま社会へ出るわけですが、優秀で勉学の意欲が強い生徒は、その上にある高等商業学校いわゆる「高商」へ進みました。さらにその上に、少数ですが商科大学もありました。

高等商業を出れば、社会のエリートへの道も開けていました。大倉商業学校は1919（大正8）年に大倉高等商業学校に昇格しましたが、大倉高商の卒業生からも大会社の幹部や日本銀行の理事になった人たちがおります。馬場克三先生も大倉商業の生徒でしたが、途中で大阪へ転校して、彦根高商（現滋賀大学）へすすみ日本銀行へ就職しています。しかし1年で退職して、たぶん旧制高等学校の検定試験をへて九州帝国大学へ入りました。その当時の心境を先生は、「自分の行くべき道についての悩みはつるばかりであった」⁷⁾と書かれています。

このように、意欲と才能のある人たちが高等商業学校にすすみ、さらに少数が、東京商科

6) 石川啄木『呼子と口笛』1911（明治44）年6月。

7) 馬場克三『句集 ひとり生え』あとがき、1981年、葦書房。

大学（いまの一橋大学ですね）、神戸商科大学（神戸大学）、大阪商科大学（大阪市立大学）などへ進んで、その中から、すぐれた学者が、特に会計学の分野で大勢出たわけです。この方達は、本当に優秀だったと思います。日本の会計学を科学といえる水準にまで引き上げたのは、この方たちの努力でした。私共はみな、多かれ少なかれ、その影響を受けて今日に至っているわけであります。

念のために申しそえますが、もちろん当時の会計学者がみんな貧乏だったわけではありません。（笑）なかには、たいへんな資産家の出の方もおられました。

黒澤清先生は、成蹊学園の実務学校から専門部を卒業して、たぶん検定試験をへて、東京帝国大学の文学部社会学科を卒業されています。

（２）黒澤清による畠中福一批判

さて、もう一人の苦学生であった畠中福一先生についてですが、私が東経大に赴任した年に開設された経営学部で学部長であった田中祐之という財政学の先生が、畠中さんと和歌山高商から東京商科大学まで同期で親しかったということで、畠中さんの苦学ぶりとははずれた勉強ぶりを話してくれました。畠中さんは、その才能を囑望されて、篤志家の奨学金をもらって勉学を続けたのだそうです。

畠中さんは、1931（昭和6）年3月に東京商科大学を卒業して、将来を約束された補手に採用されました。ところが、その年の12月にそれまでの無理が祟ったというのですが、脳膜炎で亡くなります。25才でした。田中祐之先生のお話しによりますと、愛し合っていた女性もおりまして、これからという時に本当に可愛そうだった、無念だったということでもあります。

畠中さんの指導教授であった吉田良三先生は、その死をととても惜しみまして、彼の卒業論文を森山書店から出版してもらいます。『勘定学説研究』というこの本です⁸⁾。これを読んでみたらすごい。何がすごいかと申しますと、ドイツ語の文献が主ですけれども、他に英仏の文献もくわえて、原書を大量によんで紹介し批判し、さらに自分の意見を述べたものなんですね。大学院のドクター論文でもこれほどものにはお目に掛かれません。この本は、当時の日本の会計学者に大きな影響を与えたようであります。太田哲三、木村和三郎による評論もあります⁹⁾。2年後に出た黒澤先生の『簿記原理』¹⁰⁾という著書にも、この本の影響が見うけられます。

ところで、畠中さんの著書は、出版後30年程たった後で、戦後になりますが、1966年にもう一度脚光を浴びることになります。

8) 畠中福一『勘定学説研究』1932（昭和7）年、森山書店。

9) 太田哲三、『『勘定学説研究』－畠中福一君の遺著』『一橋新聞』第168号、1933年2月10日。木村和三郎『勘定系統論(1)』『会計』32巻5号、1933年5月。

10) 黒澤清『簿記原理』1934年、東洋出版社（この著書は、戦後になって、黒澤先生の経営学博士号請求論文として1951年神戸大学へ提出された。）。

と申しますのは戦後、1950年代から60年代にかけて、「企業会計原則」立案の先頭に立って奮闘していた黒澤清先生が、当時、その「企業会計原則」を支える理論に批判的な人達の言動にいらだっておりまして、彼らへの批判を、直接にはなく、この『勘定学説研究』をいわばダミーにして行ったのです。これはある意味で、大変賢明な方法であります。

と申しますのは、わたくしも、若いときに親切な方から忠告されたんですが、「日本の学界では、生きている人を批判してはいけません」また「死んだ人でも弟子の沢山いる人は用心しなさい」、「どうしても批判したいのならその人が種本にしている外国人を批判しなさい」というんですね。わたしはその忠告をあまり守らずに、生きている方の学説を批判したものですから、たしかにかなり当たり障りがありました。(笑)

黒澤先生の畠中批判は、雑誌『会計』に連載された論文の中にあるのですが、黒澤さんは、まず次のように述べています。

「彼の遺著となった『勘定学説研究』一卷は、わたくしが、吉田良三先生の御委嘱によって、彼の遺稿を整理し、章節を付して、これが公刊を森山書店店主、森山譲二氏に託したものである。」¹¹⁾

しかし、これは教授会の審査を通った学部卒業論文だったというのですから、それに章や節を付けて整理したというのは、ちょっと腑に落ちませんでした。そこで、一橋大学の図書館へ行きまして、畠中さんの卒業論文を借り出してみました(図書番号Ayd301)。当時の卒業論文は原稿用紙へペンとインクで手書きしたものですから、大変分厚いもので、上、中、下の三分冊に分けて製本されていました。読んでみますと、編、章、節、項の表題は、すべて畠中さんの手で付けられていて、刊行本の章節は原本のとおりでした。ただ、刊行本の第6章が第1節しかないのを不自然に感じていましたが、原本には第2節(約6000字分)があることを発見しました。刊行本では脱落していたのです。

人間の古い記憶というのは、このように当てにならないところがあります。ですから、今日の私の話しも、どうか100%は信じられないようお願い致します。(笑)

さて、黒澤さんの畠中批判は次のように言っています。「非常な若さにもかかわらず、彼はすでにすぐれた見識をもった充実した会計学者であった。彼の遺著『勘定学説研究』も、きわめてすぐれた業績である。それゆえに、わたくしは彼の研究を改めてとり出し、近代的思考方法の照明をあてることによって、仮惜するところなく批判吟味しようと思い立ったのである。〔中略〕。畠中福一君の『勘定学説研究』の方法論が、三十数年後の今日なお、一部では、模倣ないし復写されているごとき傾向も見い出されるのであるが(これが言いたいところなんです)ね、彼をして、もし今日あらしめたならば、かかる傾向は笑うべきものとしたにちがいないのである」¹²⁾。

11) 黒澤清「近代的思考方法による会計理論の照明－会計学の認識論的方法論的基礎・統編」『会計』第89巻1号、1966年1月、42ページ。

また、畠中さんが、資本制生産の動因は利潤であり、これを発見（計算）することが資本制社会の「実践的要求」として現れるのは当然であり、「理論簿記学」研究の前提は、この実践的要求を資本主義的關係と関連させて観察することであり、理論簿記学の課題はその利潤をどうすれば正確に把握できるかを研究することである¹³⁾、と主張したのにたいして、黒澤さんは「いわゆる理論簿記学の中心課題をもって、簿記理論にたいする実践的要求の歴史性を資本主義的關係と関連せしめて研究することにありとするごときイデオロギーは、しょせん、調子の外れた伴奏のごときものではあるまいか。」¹⁴⁾とも嘲笑しています。

しかしそう言われたって、畠中さんは笑うことも怒ることも出来ないわけです。私は、死んだ畠中さんに代わって反批判を書かなければならないと、自分で勝手に思い込みまして、黒澤先生を批判した論文を発表しました。それが、レズメの参考論文、「黒澤理論の根本思考について－畠中福一『勘定学説研究』批判への反批判－」（『東京経大会誌』56号、1967年12月）という論文です。当時63才で企業会計審議会会長・横浜国立大学前学長・教授の黒澤先生に対して、私は33才の専任講師でしたが、何の遠慮もありませんでした。学問は真剣勝負でなければならないと思っていたからです。

実はこの論文が、私が会計学へ深入りする切っ掛けになりました。大きなことを言いすぎて引っ込むわけにいかなくなったこともあります。もう一つは、この反批判を書くにあたって、黒澤先生がそれまで書かれたものをほとんど全部読んだのですが、その中に出てくる「『会計とは何か』という問に会計学は未だ答えていないのである」という言葉に、引っ掛かってしまったんです。会計とは一体、何であると答えたらよいのでしょうか？

6. 会計の定義

「会計とは何か」という問にたいする一番手っ取り早い答えは、会計の定義を述べることです。この席には学生諸君もおりますので、定義ということについて少し説明させていただきます。

例えば、「人間とは、理性的な動物である」という、アリストテレス以来の人間の定義を見ましょう。そこでは、まず、主語である人間を包摂している動物という「類概念」を定めます。次にその動物という類を限定する理性的という特殊性すなわち「種差」を決めます。これだけです。定義というものには、どうしても一面的であるという限界があります。

それを頭に入れた上で、「会計の定義」と思われるものをまず見てみましょう。アトランダムに並べましたが、この中でゴシック体にしたところが、ほぼ類概念にあたります。

(1) **AAA**「会計とは、その情報利用者が見通しのきいた判断と決定ができるように、経済

12) 黒澤清、前掲論文、42～43ページ。

13) 畠中福一、前掲書34～36ページ。

14) 黒澤清、前掲論文、46ページ。

会計学の根底にあるもの

的情報を識別し、測定し、伝達するプロセスである。」(ASOBAT, 1966, P. 1。飯野利夫訳『基礎的会計理論』1969, 国元書房, 2 ページ)

(2) 井尻雄士「会計はある主体 (entity) の経済事象 (economic events) を伝達 (communicate) するためのシステムである。」(井尻雄士『会計測定の基礎』1968, 東洋経済新報社, 1 ページ。英文版は 1967 年)

(3) 黒澤 清「企業会計制度は、本質的に一つの情報システムである……」(黒澤清編『新しい会計学 1』1967, 日本経営出版社, 9 ページ)

(4) 青柳文司「会計学の対象は会計という言語活動, そして会計言語の指示対象が企業資本の循環過程である。」(青柳文司『会計学の原理』1968 年中央経済社, 119 ページ。1968)

(5) 馬場克三「会計というものは何よりもまず一つの計算技術機構であり, 会計的方法として定在するものである」(『会計理論の基本問題』1975 年 187 ページ)

(6) 広瀬義州「会計とは, 経済主体が営む経済活動およびこれに関連する経済事象を測定・報告する行為をいう」(『財務会計』第 4 版 2003 年, 中央経済社, 2 ページ)

最初の ASOBAT の定義は「プロセス」という類を, 次の井尻先生は「システム」という類を挙げています。その他には, 「言語活動」, 「計算技術」, 「行為」など, いろいろあります。これは丁度, “群盲象を評す” という昔の譬えがありますが, みんなで大きな象にさわって, これは壁だ, 柱だ, 綱だ, 言っているようなもので, 会計をまだ部分的にしか見ていないと言えるのであります。

会計学では, 測定, 認識, 制度など, いま極めて精緻な議論をしておりますけれども, 本質論の分野では, このようにまだ混沌としている段階なんだと思います。

「会計とは何か」ということが, 会計の定義だけで明らかになるわけではありませんが, 少なくとも, まず会計が属する類とその種差をハッキリさせることは必要でしょう。

しかしそれは, 会計だけを見つめていたのでは難しいのです。会計からできるだけズーム・アウトして, 会計の「主体」と, 会計が働きかける対象 (あるいは客体とも言いますが) をも視野に入れながら, 会計を, その会計主体, 会計客体との関連において規定することが必要なのであります。

7. 会計の主体

そこでまず, 会計の主体についてみます。主体という言葉には, 自由な意識や行動という意味がこめられていて, 普通は, 人間それ自体を意味することが多いものです。これは, 有機体という概念とも大体一致するものです。しかし, 有機体は人間に限られるものではありません。

これを会計学では entity と言いますが, 最近では「実体」と訳されることが多くなりまし

た。しかし、同じ著書を英語と日本語で書いている井尻雄士先生は、英語版では entity、日本語版ではそれを主体としていますから、entity を主体と呼んでもよろしいかと思います。

会計の主体とされるものは、広い意味では、家計から始まって、非営利会計、企業会計にいたるまで、多様な主体があります。アメリカの財務会計基準審議会（FASB）の概念報告書 SFAC では、会計主体として、「自然人、営利企業、非営利組織体、慈善団体、教育機関」などを挙げています（第 6 号 § 24）。

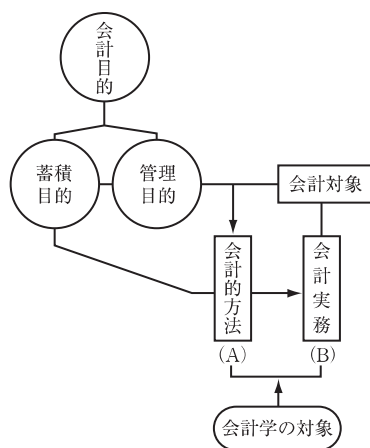
ここでは、会計という概念を企業会計に限定していますが、企業会計に限ってみても、会計主体として、個人企業主、代理人、経営者、法人、株主、支配株主、経営単位、企業それ自体、などさまざまな説がありまして、これだという決定版はまだないようです。

そんなこともあってか、会計の構造体系論では、会計主体は表に出ないで、その代わりに、第 1 図のように、会計主体が持っているであろう一般的な「会計目的」から始まるのが普通なのです。

ところが、会計学にとって会計目的は悩ましい存在でもあるのです。最近では、財務会計の目的として、「投資家の意思決定に有用な情報の提供」ということが言われていますが、目的の主体をこのように投資家だけに限定してもよいのかという議論が当然あります。また一概に投資家といっても、けっして一様ではありません。しかし、総ての会計主体に共通するような会計目的を立てようとするれば、抽象的な目的になってかえって役に立ちません。

会計目的論については、レズメにある（2）、（3）などの論文を書きましたが¹⁵⁾、かなり悩みました。当時はまだ、会計主体を人間に限定して考えていたので、どうしても目的設定の恣意性、主観性の問題にぶつかるのです。後で申し上げるように、会計の客体自身が同時に主体であり、目的を持っているのだと気がつけば、ここをもうちょっと早く突破できたのではないかと、思います。

第 1 図 会計の構造



馬場克三『会計理論の基本問題』189 ページ

15) 「会計における目的論的思考の構造－現代会計思想研究（1）」『東京経済大学創立 70 年記念論文集』1970 年 12 月。「近代会計学の目的論的性格－リトルトン理論の構造－」『東京経大会誌』73 号、1971 年 11 月。

8. 会計主体論争

いま、会計の体系では会計主体は表に出ないのが普通であると申しましたが、日本の会計学界では、かつて会計主体をめぐる議論が盛大に行なわれたことがあります。これは「会計主体論争」business entity 論争と呼ばれまして、1950年代から65年代後半まで、約15年間に渡りおこなわれました。当時の日本の主な会計学者は殆どみんな参加したと言ってもいいくらいです。

この論争の立役者は、黒澤先生と山榊忠恕先生です。これについては、昨年書いた「会計における主体と客体」¹⁶⁾という論文で、簡単にサーベイしております。

この論争では、会計主体として、個人企業主から、株主、法人、企業それ自体、まで、いろいろな主体が、あげられました。

そこで山榊先生は、エンティティ概念を歴史的に三つに区別して、整理されました。すなわち第1は、個人企業主あるいは家計から分離したばかりという「原初的なビジネス・エンティティ」。この原初的エンティティ説の提唱者として黒澤先生の名を挙げたために、黒澤先生が激怒して、論争がややこしくなりますが、それはさておきます。

第2は、資本と経営の分離が高度化した段階でのエンティティ、ここには株主の代理人としての経営が想定されています。

第3は、「経営それ自体」Betrieb an sich が成立した段階であるとしています。そして「経営それ自体」という概念を、「はるかにすすんだ思考をその根底に持つ」主体概念だと高く評価します。また山榊先生は、この第3のエンティティ概念は、「企業を、独立の『生物』であるとかんがえているもの」¹⁷⁾とも指摘しています。独立の生物、つまり企業は有機体だという認識があたりだったんですね。そこでは、会計主体として、人をこえた、企業あるいは企業資本が考えられたわけです。しかし結局、これは山榊先生自身も行き過ぎであると認めてしまったりして、この主体論争は、決着がつかないままに終わってしまいました。

しかし、この論争の中で、一時的にせよ、企業資本を会計主体であるとする見解があったこと、さらにそれを有機体であるとする見解があったことに注意しておいていただきたいと思います。

16) 田中章義「会計における主体と客体－会計主体論争を顧みながら－」『東京経大会誌』242号、2005年1月。

17) 山榊忠恕、『アメリカ財務会計』1955年、中央経済社、194ページ。

9. 会計の客体 (= 会計対象)

(1) 企業資本

さてそこで、会計が働きかける客体（会計対象とも言いますが）は何かという問題に移ります。ここでは会計として企業会計を考えていますから、「企業会計の客体」、「企業会計の対象」ということになります。

一般に企業会計の対象は「取引」あるいは「経済活動」とであるとされています。

アメリカの FASB の概念報告書第 1 号では、「財務報告は、企業の経済的資源、債務および出資者持分に関する情報を提供しなければならない。」(§ 41) と述べています。財務報告の対象を、企業の経済的資源、債務および出資者持分というように、三つに区別していますが、三つを統括する概念としては、企業資本という概念が一番適切でしょう。

青柳先生も、先ほどあげた定義の中で、会計言語の指示対象として「企業資本の循環過程」をあげています。また馬場先生は、「会計の対象となるものは、取引として現われる企業活動そのものであるが、これは一般的には企業資本の運動といい換えられるものである。」¹⁸⁾ としています。

(2) 企業資本の構造—有機的構造—

馬場先生はつづけて、「しかしここで大事なことは、(中略)、この対象自身、一定の構造と独自の論理とをもっているということの認識である。一般に会計行為は、対象のもつこのような論理にしたがうのでなければ、これを一定の目的に適うように処理することができるものではないのである。」と指摘しています。



18) 馬場克三『会計理論の基本問題』1975, 森山書店, 189 ページ。

会計学の根底にあるもの

つまり会計は、その対象（企業資本）の構造と論理に規定されるのだというのですから、会計が何であるかを明らかにするためには、まずその対象の構造と論理を知る必要があるということになります。

では、会計の対象である「企業資本の構造と論理」とはどういうもののでしょうか。これは、マルクスが生涯を掛けて研究したテーマでありまして、Das Kapital『資本論』という大著にまとめられています。

これをここで一口に要約するのはどだい無理なことなので、ここでは、資本は貨幣が変化した価値であるということと、資本は有機体であるということの二点を指摘させていただきます。先に申したように、有機体というのは、自己同一性を保ちながら展開する動的なもの、したがって主体としての性格をも持つのです。

貨幣は、皆さんの財布の中にあるお金でも、一定の条件を与えると資本に変化します。ちょうど、ピラミッドの中で数千年眠っていた蓮の種でも、一定の湿度と温度などの環境を得ると芽を出して、みずから蓮になり、成長して大きくなる様なものです。

貨幣から変化した資本は、成長すると、枝分かれや、株分かれをします。製造業の資本についてみると、製造部門、流通部門、金融部門といった枝分かれをします。さらには、それらが株分かれをして商社や銀行になります。商業資本や金融資本という資本の亜種が生まれるのです。

では、このような資本の本質は何かと申しますと、何よりもまず、自分自身の価値量を増やすということです。『資本論』では、資本を定義して「資本とは自己増殖をする価値である」といっています。だから、いつまでも増えない資本、あるいは減る資本は、資本ではありません。会社が潰れたというのは、そうして資本でなくなった、ということです。

でありますから、資本にとって自分がどれだけ増えたかを知ることは、本質的な問題なのです。では、それをどうやって認識するのでしょうか？

（３）資本の一形態としての、資本の自己意識としての会計

じつは有機体である資本は、自分自身のなかに増殖価値を認識し計算する部分（脳細胞）と機能を作り上げているのです。それは、貨幣がもっている「計算貨幣機能」が展開したものです。計算貨幣の機能というのは、ある財の価値を、実際に換金しなくても測ることができる便利な機能です。私が、自分の財産の価値は500万円であると申告する時には、この計算貨幣機能を使っているわけですね。

たとえば、「財務諸表における測定とは、そこに計上される諸項目に貨幣額を割り当てることである」¹⁹⁾と言われますが、これは、計算貨幣機能を使っているのです。

19) 企業会計会基準委員会、討議資料『財務会計の概念フレームワーク』2004年7月2日、24ページ。

資本がおこなうもっとも基本的な計算は、期首資本と期末資本の価額を比較・照合して、差額を計算することです。岩田先生は、会計の本質は照合であると言っていますが、その意味でもこれは重要な指摘であると思います。この価値計算の機能は、企業資本がある程度大きくなると、形態的に枝分かれして会計部門となり、さらに精緻な計算を行うようになります。

しかし皆さんは、「そうはいつでも、計算をするのは、やっぱり人間じゃないか」とおっしゃるかも知れません。そうです。しかし、その人間も会社では、労働力という流動資本の一部になっているのです。彼が使う計算機は固定資本なのです。つまり、資本というものは、有機体ですから、必要とあれば、自分の外にある、人でも、機械でも、自然でも、学者でさえも、取り込んで資本のモメントにしてしまうのであります。ちょうど、生物が、外部からいろいろな無機物質、有機物質を取り込んで、自分の体に同化してしまうのと同じです。

だから、会計というものは、経理マンも計算機械もソフトも含めて資本の一部分なのであり、資本が内包する一つの形態なのであり、その形態が行なう機能なのであります。

また、その機能からみれば、会計は、資本という主体の「自己意識」、「自覚」であると言えます。会計というものは、資本の脳細胞、自己意識なのですから、資本にとって非常に重要なもののなのです。この「自己意識」Selbstbewußtsein という概念は、哲学者ヘーゲルが重視した概念でありまして、かれは、人間だけでなく事物とくに有機体には自己意識があると考えていました。

さらにまた、資本の会計機能の一部分は、株分かれして自立します。企業資本の経理や監査を代行する事業、税理事務所、会計事務所などがそれで、わたくしは、それを「会計資本」と名付けたことがあります。

この、会計が資本の一つの形態であるということや会計資本のことを書いたのが、レズメの（６）と（７）の論文²⁰⁾です。そこでは、会計が資本の自己意識であるということまでは考えておりません。しかしこのたいぶ以前に書いたものを、最近評価して下さる人がいたりしまして、勇気づけられております。

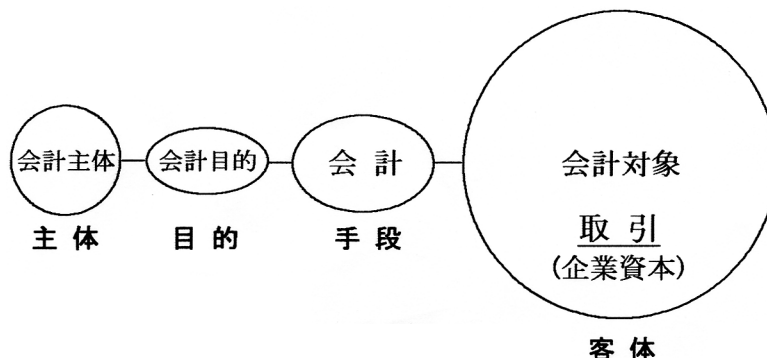
10. 会計主体、会計客体、会計

（１）会計主体と会計客体の同一性

さて、こんな風に考えて見ますと、会計主体、会計客体（会計対象）、会計という三者の関係についての、第２図で示したような通説的見解は、かなり大きく変わるのではないかと思います。

20) 「いわゆる個別資本の方法について」『東京経大会誌』86号 1974年3月、「会計において内容と形態」1976年7月『東京経大会誌』96号。

第2図 会計主体・会計客体・会計の関係についての通説的見解



第3図



主体 = 客体

います。

まず、これまで会計の**客体**であるとされてきた企業資本は、同時に会計の**主体**でもあるということになります。これは、資本が有機体であるということが明らかになれば、不思議なことではありません。(第3図参照)

資本自体が会計主体であるという認識は、さきにご紹介した会計主体論争でもすでに現れていました。山榊先生は、「経営それ自体」(Betrieb an sich) という概念を、「はるかに

すすんだ思考をその根底に持つ」主体概念だと指摘していましたし、黒澤先生も、“エンティティとは何か”と題して述べているところで、「企業は、企業所有者または企業における個々の人間に対して、それ自身の内的法則にしたがって運動するところの独立の存在者 (Independent entity) として対立するにいたるのである。」²¹⁾と指摘していました。

またこれまで**会計それ自体**は、企業資本に対して外的な存在であるとされてきましたが、私の考えによれば、会計は資本の一つの形態、つまり資本の一つの姿、であるということになります。

(2) 主体としての資本と主体としての人間

では、主体としての資本と、これまで会計主体といわれていた人間（資本家、経営者）との関係はどうなるのでしょうか？

会計の主体を考える場合、従来われわれは、主体とは人であり、たとえ拡張しても人の組織である、という前提から抜け出せませんでした。実はこれを突破して見る必要があった

21) 黒澤 清『近代会計学』1951、春秋社、11～12ページ。

のです。このことに、私はかなり時間を費やしました。

たとえば、資本家という人の役割をどう位置づけるかについて、『資本論』ではよく、「彼は、資本の Träger である」と言います。トレーガーとは、ドイツ語で、担い手、担ぎ屋のことですね。あるいはまた、「資本家としての彼は personifiziertes Kapital にすぎない」といいます。

これは、これまでの翻訳では「資本家としては彼は人格化された資本でしかない」と訳されていますが、どうもピンとこない訳です。それが最近、『資本論』第 1 巻の新しい翻訳が出版されて、「資本家としての彼は、人間の姿をとった資本にすぎない」²²⁾と訳されています。この翻訳は、本学の今村先生や三島先生などが、『マルクスコレクション』叢書として、筑摩書房から出している六巻本の中にあるのですが、これは、資本が有機体であり、主体であるということを、よく表現している、読みやすい翻訳です。ぜひ一度ご覧になってみてください。

資本は、自分で喋ったり、移動することは出来ませんが、主体なのですから、欲望や目的をもっています。競争や嫉妬や詐欺までもします。だから、「すぐれた」資本家とか経営者とされる人は、実は、資本の言葉がよく聞こえる耳を持っている人、あるいは資本の気持ちになり切れる人なのだろうと思います。

最近、「フジテレビ」を乗っ取ろうとして話題になったライブドア社長の堀江貴文さんという人も、なかなかいい耳をしている、という感じがします。この間テレビを見ていたら、日本放送株式の買い占めについて、「私がやらなくても、必ず誰かがやりますよ」といっていましたが、その通りですね。資本は、その担ぎ手をとくに選びません。資本の目的に添わなければ取り替えればいいんです。

堀江さんの言動を見ていると、「資本家としての彼は、人間の姿をとった資本（投機資本）にすぎない」ということの意味がとてもよく分かる気がいたします。（笑）

（3）会計と観念

このように申しましたけれども、じつは、最初から資本が人間を支配していたわけではありません。逆に、人間が、正確にいうと人間の経済的関係が、資本を作りだしたのです。さきに貨幣が資本に転化したと申しましたが、そもそも貨幣は、社会の中での人々の交換関係によって作りだされたものなのです。

このように人間の関係が物として産みだされることを物象化といい、貨幣のような人間が作りだした物に人間が支配され、それを崇めることをフェティシズム（物神崇拜）と申します。貨幣はさらに、特定の人間関係のもとで資本に変化するわけですが、その資本もまた、

22) 'Als Kapitalist ist er nur personifiziertes Kapital.' (K. Marx, Das Kapital, MEW, Bd.23, S.247.)
今村仁司・三島憲一・鈴木直 訳『資本論』第 1 巻上、マルクス・コレクション、2005 年、筑摩書房、340 ページ。

それらの人間関係が物として現れたもの、物象化したものでありますから、そこでも資本へのフェティシズムが生まれます。貨幣や資本に止まらず、現代社会には、いろいろな種類のフェチが充満していることはお気付きの通りです。フェティシズムはさらにそれに固有の観念を伴います。

資本の一形態である企業会計にも、資本と同じように、会計フェティシズムが生じ、それにとまなう観念がうまれるのです。したがって会計には、会計フェティシズムにもとづく何らかの観念が付着していることに注意しなければなりません。そしてそれらの観念が、会計理論や会計基準形成に影響を与えているのであります。

戦後日本における会計理論と政治的観念との結びつきを検討したのがレズメの (11), (12) の論文です²³⁾。

(4) 社会的総資本と政治、法制度

さて、これまで企業資本と申してきたのは、個々の企業資本つまり個別資本のことです。個別資本は、お互いに喰うか喰われるかの競争をしています。全体としては社会的分業の関係をもって、「社会的総資本」と申しますか、「社会的産業有機体」を構成しています。もし、過度の競争や抜け駆けなどによって、総資本自体の利益を損う恐れがあると、それを防止するための規制を行なったりします。政治や法律の役割とも関係してくるわけです。

しかし、産業資本の場合には、生産する商品が多様多様ですから、利害の対立も複雑で、総資本としての連帯性には一定の限界があります。

それにたいして、金融資本というのは資本価値そのもののような存在です。お金を借りる、貸す、投資する、といった行為だけをする独立の価値ですから、その資本としての主体性と目的は 100 % モロに発揮されます。したがって、金融資本が連合することは、他の産業資本よりも容易なのです。しかも、最近のヘッジファンドの動向に見られるように急激に膨張して、いまや、その他の資本を支配する時代になっています。

したがって、今日の経済規制の主体は、金融資本あるいは投機資本であることがわかります。商法における会社計算規定（会社法）や、企業会計基準の設定主体も、また、同様であると思われるのであります。

というわけで、若い諸君に申しあげたいのですが、もし将来経営者として、あるいは資本家として、成功したいと思うならば、資本の声が聞こえるような、本当の「よい耳」をつくることが大事です。

そのためには、まず毎日、新聞を読むことが必要ですね。マスコミは人間を主体にした記

23) 戦後日本における会計学と政治 (1)・(2),『東京経大会誌』202号 1997年3月, 203号 1997年7月。

事を好んで書きますが、その裏にある、本当の主体である資本の意図を聞き取るようにしていただきたい。資本の自己意識の表出である、財務指標、経済指標を読み取る能力をみがくことも大切です。

そのようにして得た情報を元にしながら、自分で考えなければならないわけですが、そのために役立つ、基本テキストは何かと聞かれれば、それは今でもやはり、経済学の最大の古典である『資本論』だと、私は思います。ですから、諸君、出世をしたければ、偉大な経済学者であり哲学者であったマルクスの書いた『資本論』をぜひお読みなさい。(笑) こう申しあげたいのであります。

今日のお話しは、問題を「会計の根底」に限定しましたので、法律や制度との関連には、及びませんでした。「会計とは何か」ということは、資本という土台と、その上にある法律や政治などの諸制度、さらには観念などをひっくるめた、「総体」として明らかにされなければならないと思います。会計の総体的把握については、若い世代の皆さんの力に期待するものであります。

おわりに

さて、もうそろそろ時間でございますが、最近よく、お前はこれから何をしたいのかと聞かれることがございます。“わが友、野良猫ゴロニャンと遊びたい”とか“のんびり温泉めぐりをしたい”という気持ちもあるのですが、まずは、今まで書き散らしてきたことを纏めてみたいと思っています。

一つは、きょう申しあげたような会計の根底にあるものを浚い上げて、「会計本質論」を纏めてみたいと思います。それには、まだまだ分からないことが多いので、もっと勉強を続けなければなりません。

もう一つは、日本の会計学という、黒澤批判論文以来こだわってきた、私どものルーツについて、書き残しておきたいとおもいます。十数年前に、20 人ほどの先生方と一緒に科研費による共同研究として、13 人の長老の先生方にインタビューした記録（『インタビュー 日



会計学の根底にあるもの

本における会計学の発展』1990, 同文館)が残っていますので、これを元にしてさらに共同研究が続けられればと期待しています。

実はこの最終記念講義を提案された時には、いささかためらったのですが、これまでの考えを整理する上で大変役に立ちました。準備委員長久木田先生始め世話人の先生方の狙いも、そこにあったのではないかとと思うのであります。暖かいお心遣いに感謝申し上げたいと存じます。

振り返って見ますと、私の人生は、その節目節目で、いつも心やさしい人たちに助けられ、支えられてきたことに、改めて気がつくのでございます。これから先のことはどうなるかわかりませんが、今までのところは、大変恵まれた、幸せな人生でありました。

今回も、わざわざお集まり下さった皆様のおかげで、人生の大きな節目の一つを晴れがましく迎えることができましたことを、とても嬉しく思います。心から御礼申しあげて、結びの言葉といたします。本当に有難うございました。